

国際動物叙事詩学会東京大会

原 野 昇

1. 開催までの経緯

国際動物叙事詩学会については本誌の第1号、第6号にそれぞれ第4回大会、第7回大会の報告を行っているので、ここで繰り返す必要はないことと思う¹⁾。隔年に開催される定例大会の間に挟んで、東京で特別大会を開催するようにと正式に要請されたのは、1993年7月にフランスのオルレアン大学で開催された第10回大会の席上においてであった。その時点では1996年、1998年、2000年の選択肢があった。早速準備にとりかかり、1994年9月に国際動物叙事詩学会東京大会 Colloque de Tokyo de la Société Internationale Renardienne組織委員会と同実行委員会とを発足させ、その代表に原野が就任し、国際動物叙事詩学会東京大会事務局を広島大学文学部フランス語学フランス文学研究室に設置した。

まず大会の期日と期間および開催地（都市）を慎重に検討し、1996年7月22日（月）－25日（木）、東京都と決定し、参加希望者の送金の便を図るため、銀行口座、郵便振替口座のみでなく、クレジットカード（VISA, MC）の加盟店許可申請を行った後、予備登録の締切日を1995年6月末日として、第1回回状を1995年3月に発送した。

その上で、同年7月にドイツのデュッセルドルフで開催された第11回国際動物叙事詩学会に松原、福本、原野が出席し、総会の席上で改めて概要を案内した。

1995年10月20日－11月3日にはGabriel BIANCIOTTO会長を東京大会の下準備も兼ねて、日本学術振興会の短期研究員として招聘した。同氏は広島大学（26日、*Le Bestiaire dans la littérature médiévale*）、日本フランス語フランス文学会1995年度秋季大会（奥羽大学、29日、*Fragmentation du récit et inconvenance des sentiments dans le Tristan de Béroul*）、日仏会館（11月1日、*Le feu au Moyen Age*）で講演されたが、その間実行委員会のメンバーとたびたび打ち合わせを行い、会場予定の慶應義塾大学や宿舍も下見していただいた。

その後、慶應義塾大学文学部フランス文学教室の全面的バックアップをいただき、会場を慶應義塾大学（三田、北新館）でお引受けいただくことに正式決定し、それに連動して、海外からの参加者の宿泊施設を芝公園のホテル・メルパルク東京とし、エクスカッションを最終日に日帰りで行うことなど、プログラムの概要を決定し、発表希望者および参加予定者リストとともに、第2回回状として1995年12月に発送した。

1996年2月に補足のインフォメーションを送り、5月末に詳しい情報を載せた第3回回状を発送した。これには会期中に開催される「文学にあらわれた動物」と題する貴重資料の展示会や、ミゼリコルドのビデオ上映会の案内なども掲載されている。

その後、広島大学仏文教室の大学院生の協力を得て、パソコンを駆使した手作りの立派なプログラムを作成し、当日に臨んだ。

2. 基調講演と研究発表

初日7月22日(月)の午前中は、国際動物叙事詩学会の創設者で名誉会長の Kenneth VARTY グラスゴー大学名誉教授の *Une petite histoire de la Société Internationale Renardienne et de ses activités scientifiques*, 川田順造東京外国語大学アジア・アフリカ研究所教授の *Allégories des animaux dans les représentations verbales : réflexions comparatives* という2つの基調講演があった。

その後、初日の午後、2日目23日(火)の午前と午後、3日目24日(水)の午前と午後、合計9つのセッションに分けて19編の研究発表がフランス語、英語、ドイツ語で行われた。第2回回状発送の時点では2編の講演と27編の研究発表の申込みがあったが、プログラムでは研究発表が20編予定されていた。そのうち Tours 大学で博士号を取得し、コートジボワールのアビジャン大学で教鞭をとる Paulis ZIGUI KOLEA 氏の来日が当日になって中止となったので、最終的には2編の講演と19編の研究発表となったのである。

内容は『狐物語』や動物誌に関するもの、イコノグラフィーに関するものなど、毎回本学会で扱われるテーマのほか、今回は日本で開催されるということで、日本文学における狐や狸などの動物を扱ったものや、天草版伊曾保物語など日本におけるイソップ寓話を扱ったもの、またマルコ・ポーロの『東方見聞録』を扱ったものなど、日本の大会ならではの研究発表も目についた。

広島からは村上勝也広島文教女子大学教授(広島大学文学部ラテン語非常勤講師)の *Sources européennes des versions japonaises ésoques du XVI^e siècle* と四反田想広島大学文学部助教授の *Comparaison intertextuelle du Physiologus* があったが、いずれも発表後いくつかの質問や意見が相次ぎ、大好評であった。四反田氏の発表はドイツ語で行われた。なお原野は *Numérisation du Roman de Renart* と題する簡単な報告を行った。その他本会会員の André KÆNIGUER氏と今田良信氏も参加されたが、参加を予定されていた前田弘隆氏は当日所用のため急遽参加をとりやめられた。

フランス、イギリス、オランダ、イスラエル、アメリカなど海外からの20名余と在日フランス人を含めた日本からの参加者に加え、6か国(国籍所有者で言えば8か国)約60名(レセプションのみの参加者を加えれば70名近くになる)が、3

日間熱心な研究発表と意見交換を行った。学会の成否は会場や受け入れ態勢など外面的な側面もさることながら、研究発表の質の高さが肝心なことは言うまでもないが、今回の東京大会はその面でも他の定例大会と比して決してひけをとるものではなく、日本からの初参加者のみでなく、遠来の参加者も異口同音に称賛していたことである。

3. 展示会とビデオ上映会

大会期間中、慶應義塾大学附属図書館のご好意により、「文学に現れた動物」と題する一般公開の特別展示会が、国指定重要文化財である同大学の旧図書館において開催された。企画は松原教授と江戸文学がご専門の関場武同大学文学部長とが共同であられた。展示品は『木幡ぎつね』、『のせ猿草紙』、『猫の草紙』（いずれも御伽文庫本）、『蛤の草紙』（丹緑本）、『熊野の本地』（絵巻）、『弥兵衛鼠』（絵巻）、『十二類絵巻』、Panchatantra (traduction de Lancereau)、Kalila wa Dimna (Jill Sandra Cowen)、Persian Fables、Aesopica (B. E. Perry)など同大学図書館所蔵の貴重資料を中心に、一部個人所蔵のものを加え、さらに広島大学附属図書館が所蔵する欧米以外では唯一の『狐物語』古フランス語羊皮紙断片（t写本）が特別出品された。いずれの展示品も瞠目に値するものばかりで、見学者はみな食い入るように見つめていた。

大会2日目の夕方、研究発表終了後には、ミゼリコルドのビデオ上映会が開催された。ミゼリコルドというのは教会の内陣の両側にある聖職者席に設けられた、多くの場合跳ね上げ式の、小さな腰掛けのことである。ミサなどの祭式が長時間におよぶ場合が多く、その間立ったままでいることは、特に年とった聖職者にとっては苦痛であるので、これに軽く腰を乗せ、背を板壁にもたせ、会衆からは立っているように見えるようにしたのである。そこからミゼリコルド（慈悲）という名前がついた。この腰掛けの下側は「持送り」となっており、そこに様々な彫刻が施してある。場所が尻の下という場所だけに、神聖な宗教的な場面を描くわけにいかず、そこには家具職人の自由な発想による、世俗のあらゆる職業、生活のありとあらゆる場面、各種の動物、文学作品の場面が、空想的なものも含めて彫られているのである。教訓的なもの、滑稽なもの、糞尿譚的なもの、なかには卑猥なものまである。一般信者は足を踏み入れることさえ畏れ多くて不可能な、神聖な上にも神聖な、教会の内陣の祭壇近くに、このように大胆かつ自由な発想の彫刻が施されたということ自体驚きであり、中世の奥深さを思い知らされるのである。

このミゼリコルドの研究を長年続けてこれ、世界中を隅から隅まで駆けめぐり、専門家的な高度な技術でスライド撮影を行い、自宅に10万枚のスライドを所有している、ミゼリコルド学会会長のElaine BLOCK女史は国際動物叙事詩学会の

常連で、毎回その成果の一端を披露されるが、この度は研究発表のほかに、自身が作成されたミゼリコルドのビデオの一部を紹介された。西ヨーロッパ各地の片田舎の教会や、東欧の教会のものなど、普段一般の人には滅多に訪れる機会のないものや、訪れても見逃してしまうものなど、優れた撮影技術で作成されたビデオに、観衆は魅了されていた。なお同女史が出版されたミゼリコルド関係の書物の見本とビデオのパンフレット類が、会場の受付横に会期中展示されていた。

4. エクスカーションと懇親会

国際学会にエクスカーションはつきものであり、国際動物叙事詩学会も毎回種々のエクスカーションが企画される。その場合多くは中世かそれに近い時代に関連する名所旧跡が入っていることが多いが、今回はヨーロッパ以外で開催される初めての会議ということで、思い切り日本らしさを味わってもらうことにした。箱根で温泉につかり、芦ノ湖の遊覧船の上から富士山の雄姿を眺めて、小田原の伝統工芸寄木細工の工房を訪れ、箱根武士（もののふ）の里美術館で日本の武具甲冑を見学するというコースである。天候の加減で富士山は見えなかったが、参加者はすべてに大満足の様子であった。特に湯本の露天風呂にはBIANCOTTO会長をはじめ、男女それぞれ数名が入湯したが、みな大満悦で、時間が限られていたことをしきりに残念がっていた。

懇親会は初日の夜のCocktail d'accueilと3日目夜のBuffet de clôtureの2回用意された。2回とも学会会場と同じ建物にあるFaculty Club（パレスホテル経営）を会場とした。初日の歓迎パーティーには慶應義塾の塾長、国際交流担当常任理事（元文学部長）、附属図書館長、文学部長、文学部フランス文学教室の方々など慶應義塾大学総出の歓迎であった。

最終日の懇親会は通例Banquetと称し正式な晩餐会が用意されるが、今回は敢えて固定席ではないbuffet形式を選択した。その方が多くの人と話すことができると考えたからである。結果は大好評で、ほとんどすべての参加者がすべての人と言葉を交わしたようである。とくに研究発表後なので、話題も発表をめぐっての情報交換も多く、その面でも有意義だった。また国際動物叙事詩学会は、アーサー王学会やランススヴァルス学会などのような他の中世文学関係の大規模な学会に比べて、小さな学会なので、もともと会員相互の関係がひじょうに親密であるが、このような懇親会を機に初参加の人も含めていっそう親交を深めることができた。

5. Actes の刊行

このように東京大会は大成功の裡に終了した。残るはActesの刊行である。以前は大会の度にその大会のActesが刊行されていたが、第6回大会以降は本学会の機関誌Reinardus（年刊）が創刊（1988年）され、大会で発表されたものの中から優

れたものを精選し、2号にわたって掲載されてきている。同誌の編集委員会は隔年に開催される定例大会で発表された論文の中から同誌に掲載する論文を選び、編集し、毎年一冊ずつ出版していくのに追われており、同誌の特集号として東京大会の *Actes* を刊行することは不可能なので、第5回大会以前のような形式、すなわち *Actes du Colloque de Tokyo de la Société Internationale Renardienne* (仮題) と題する独立した書物として、1997年12月頃刊行する予定である。その際には一人でも多くの方々に目を通していただきたいと思っている。

注

¹⁾ その他、『学術月報』vol.39, No.1(1986), p.60; 『フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会中四国支部) 20号(1995年), pp.24-30; 『文学』(岩波書店, 1996年春季号) p.156 参照。